

# アカウミガメ 回遊経路教えて

絶滅の恐れがあるアカウミガメの回遊経路を調べる名古屋港水族館（名古屋市港区）の研究が7月から始まる。謎に包まれた生態に海水温の変化が影響しているとみて、米国などの研究機関と共同で解明させる。研究は5年間に及ぶ計画で、栗田正徳館長は「将来の気候変動を見据えた保護活動につなげたい」と期待する。（坂本圭佑）

北太平洋中部で暮らすアカウミガメは、エルニーニョ現象で海水温が高くなる、北米大陸西海岸に向けて泳いでいく。米国やニュージーランドなどの研究者らは、こうした仮説を立てて調査に乗り出す。

同館で繁殖した二歳ほどのアカウミガメに、位置情報を確認するための送信機を取り付け、毎年二十五頭を北太平洋中部で放流。海水温や海流などのデータと合わせ、回遊経路との関連性を調べる。

アカウミガメの繁殖に実績のある同館は二〇〇三―一三年にも、日米共同で北太平洋の回遊経路を調査した。その結果、日本生まれの子ガメは泳力の乏しい間、黒潮に乗って東へ移動し、成長後は餌の豊富な北太平洋中部で暮らしていることが明らかになった。

当時は送信機の寿命などで追跡に限界があり、西海

岸まで到達を確認できたのはわずか。一方、西海岸へ向けて泳いでいくタイミングは、いずれも海水温が高い条件下だったことから、研究者はエルニーニョ現象が起きると、アカウミガメは西海岸に向かう習性を持つとみている。

仮に回遊経路が海水温に左右されるなら、地球温暖化で海水温が上昇した場合、アカウミガメが今まで生息していなかった海域に泳いでいってしまう可能性がある。新たな天敵に直面するなど過去にない脅威にさらされる恐れがあり、生態を明らかにすることで効果的な保護活動につなげる。

同館では二十日、米国の研究者らがアカウミガメの甲羅に送信機を取り付ける作業に取り組んだ。国内を二十七日に出発する予定で、七月中旬に北太平洋中部の沖合で放流する。



栗田館長は「アカウミガメの回遊経路は謎に包まれており、どこに生息しているのかを把握できれば、保護につなげることができると期待している。気候の変化がどう影響しているのか明らかにしていきたい」と話した。

アカウミガメの甲羅に送信機を取り付ける研究者ら＝名古屋市港区の名古屋港水族館で